

Title	英先生の追想
Sub Title	
Author	内山, 正熊(Uchiyama, Masakuma)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1995
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.68, No.7 (1995. 7) ,p.217- 218
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英修道先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19950728-0217">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19950728-0217</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 英先生の追想

政治学科の超弩級教授、林毅陸、板倉卓造、及川恒忠の三先生の流れを汲む長老教授、英修道先生が昨年初秋に逝かれた。昨年は早春に伊藤政寛先生、初冬には今泉孝太郎先生が逝かれて、明治生れの法学部スタッフには、津田利治先生が鎌倉で御健在であるのみになった。戦前の古きよき時代の大学教授の威信を備えた英先生今や亡く、明治は遙か遠くになりにけりの感が深い。

英先生は生粹の三田育ちで、幼稚舎から大学まで塾に学ばれたので、慶應色が骨の髄<sup>ずい</sup>までしみこんでいた学者であった。国際法学会、国際政治学会の重鎮で、帝国大学、殊に東大の学者の独壇場の観があった学会（現在数え切れないほどある学会も、戦時中までは極めて少く、国際関係では国際法学会だけ）では、執行部に会計主任として英先生の御名前があったのを覚えているが、先生は夙に私学の代表格で活躍していた。因みに国際法学会の理事長は、歴代帝大出身であったが、私学出で最初に理事長に就任したのは、前原光雄先生

であり、国際政治学会の第二代理事は英先生であった。理事会で神川初代理事長から次の理事長に英先生を指名されたとき、「お引受けします」と力強くいわれたのを思い出す。

ところで、法学研究に載せられる以上には、先生の業績に言及すべきであろうが、これは松本三郎、池井優という実に優秀な後継者がおられるので、その方に譲ることにして、私は個人的に感じたことだけを少し述べて責めをふさぎたいと思う。松本、池井両教授がえらいと思うのは、お二人が英先生のおきびしい特訓に耐えられたことである。私のような生角のある人間はともついで行けなかっただろうと思うのであるが、英先生によく仕えた両教授には脱帽のほかない。英先生のしつけのおきびしさはさぞやと思うのは私だけではあるまい。しかし、今にして思うとそれは愛の鞭<sup>むち</sup>であった。それは私が鮮烈な体験をもっているからである。

戦争末期、同期に助手になった中村菊男君と私は、気軽に英先生を表敬訪問しようということになって、二人でふらりと雪ヶ谷の御宅を訪問した。ところが、何の予告もせずに伺ったわれわれは、門前払いをくわされたのである。長上の者を訪問するには予めアポイントメントをとってからにすべきであるということをお先生はびしりと教えて下さったのである。

これは実に痛切な経験であった。学者は論文を書いたり構想をねったりしている最中に突然中断されると、全くやり直しせざるをえなくなることを後日知って、英先生の御応待によって学者のマナーを教えられたのを感じている。しかしその後、予め御連絡してから伺ったときには、こんなにおいしいのは生まれて初めてだと思っただと美味絶佳のコーヒーを御馳走して下さい。

次に、先生らしい言動に接したのは、もう四十年も前になるが、戦後初の塾派遣の法学部海外留学で島谷先生と御一緒に英国にいらしたときのことである。温厚そのものの島谷先生とは対照的な英先生は、まだその頃敗戦国民の肩身の狭さもあってか不愉快な経験をなさったらしく、そのトラブルについてそれは金で話がつくことだろうとツイといわれたのを覚えている。先生は人の顔色を見て人の機嫌をとるといふ卑屈な態度を嫌われたのである。

英先生は外交官試験委員をなさったりして外務省に関係もおありであっただけに、御令息が一昨年、駐伊大使になられたことに、どんなに御満足であったか察して余りある。先生の外交持論を御令息が実践面で生かされたのを見届けられたからである。私はその正道氏を大学院時代から知っており、

英国駐在の官補時代、経済協力局長時代も知っているが、氏は優れて外交官気質を備えた英才であった。私はいま、ハロルド・ニコルソンの「外交」を繙いているが、その中に「理想的なディプロマティスト」という一章があり、そこではよき外交交渉には、「モーラル・インフルエンス」が基にあると指摘されている。その精神的な背景というのは、七つの外交的徳目である。その第一は、眞実で信頼されること、第二は、あいまいでなくきっぱりしていること、第三は冷静であること、第四は、明るく気立てがよいこと、第五は辛棒強いこと、第六は中庸であること、第七には忠誠の念があることである。このような資質が正道氏にはすべて備っているのは、と氣付いたのである。

父上の薫陶を受けた氏が外交官コースを順調に歩んで、ニューヨーク総領事、外務省報道官という重要ポストを立派にこなし、一流国の大使に抜擢されたことは故なしとしない。戦前の数少ない塾出身外交官の中に堀切善兵衛駐伊大使があったが、奇しくも正道氏はまたイタリア大使になられた。英大使は慶應出身外交官のホープである。よき後継に恵まれた先生、安らかにやすみ下さい。(一九九五・三・一三)

名誉教授 内山正熊